

今年度から「データ・AI・情報リテラシー」という名称で MDASH リテラシーレベルのモデルカリキュラムに基づく教育を開始し、その取り組みに関する点検・評価を実施した。その各項目は MDASH の認定を受ける上で決められていて、それに対して点検・評価を行った各々の結果を示す。

## 1. 学内からの視点

### (1) プログラムの履修・修得状況

全学科1年生が前期に教養必修科目の「人間と情報」を履修し、その単位の取得をプログラムの修得としている。履修登録の確認期間中に教務部の協力を得て履修漏れがないことを2023年4月19日の講義で確認できている。追再試の成績評価が終了した時点で、退学や休学などの理由以外でプログラムの単位が必要な履修者全員(257名)が無事に1年次前期で修得条件を満たした。

### (2) 学修成果

健康福祉学科の成績評価を2023年8月7日までに提出することが条件であったため、その時点での成績評価は講義最終回で提出することになっていた特別課題が未提出だった7名(退学や休学を希望する可能性があった学生も含む)を除いて、修得条件を満たしていた。特別課題の未提出者は最終回以外の講義に対する課題への取り組みは不十分であった。不可になった7名のうち3名が追再試を申込み、該当者に課題を提出させて再評価した結果は単位認定の基準を満たし、プログラムの単位が必要な履修者全員が修得したことにより、学修成果を適切に評価できているといえる。

### (3) 学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度

授業アンケートの問3「この授業の目的や「学修成果」、成績評価の方法・基準、内容についてどの程度理解できましたか。」において、(4)で授業の内容に関する理解度を問う項目があり、「大変良く理解できた」および「よく理解できた」を合わせて回答率が9割を超えていたので、多くの学生が理解できていると考えられる。

### (4) 学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度

該当科目が必修となっていて後輩等他の学生への推奨は特に必要ではないが、総合評価値は満足度を表す指標でもありと考えられ、それが3.48であったことにより後輩等他の学生への推奨度は高い可能性があると考えられる(総合評価値の上限は4.0)。「大変良かった」および「良かった」を合わせた回答率が9割を超えていて、(3)に示した「大変良く理解できた」および「よく理解できた」と同様の傾向があり、「大変良く理解できた」および「よく理解できた」の満足度が高くなったと考えられる。

### (5) 全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況

該当科目はプログラム修得において必修となっていて全学科の1年生が履修し、それを今後も継続させる。各学科の総合評価値を安定させるためにも全学科1年生の必修科目として開講することが必要であると考えられる。

(6) 数理・データサイエンス・AI を「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること

授業アンケートにおいて、授業形態・方法に関する質問が9個あり、「体験的な学習(実習、実験、フィールドワーク等)の機会があった」に注目すると、約8割の学生が満足できていたと考えられるので、数理・データサイエンス・AI を「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させている授業であったと考えられる。

(7) 内容・水準を維持しつつ、より「分かりやすい」授業とすること

授業アンケートにおいて、授業形態・方法に関する質問は学修成果を高めるためにどのような工夫がなされていたかどうかを9問の回答状況で把握することができ、教材の工夫が最も高かったことから内容・水準が適切であったと判断し、「分かりやすい」授業であったと考えられる。

2. 学外からの視点

(1) 教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価

令和5年度からプログラムを開始したところであり、プログラム修了者が地域のそれぞれの組織(企業、自治体、団体等)で数理・データサイエンス・AI を活用することが期待され、今後は学生が就職した組織の意見も聞きながら、プログラムの改善を検討する。

(2) 産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見

本学は「一般社団法人富山県経営者協会 IT・インフラ部会」に加入していて、その意見交換会などが年2回開催されている。令和5年度は「生成AIの利用」に関する議論を部会で行い、その際に参加している企業に本学の取り組みを説明し、それに対する以下の意見をいただいた。

[A社の意見]

貴学の教育のなかで、カリキュラムにビジネススキルに関する学習が盛り込まれていること、演習課題の材料が学生の方々の接する地元の実データであることは、素晴らしい取り組みであると思います。それはできるだけ地元に貢献してほしいという意味だけではなく、生活や社会活動のデータに分析や課題抽出を見出すというアクションは社会問題の解決、人々の困窮からの脱却、ビジネスの発展という実体社会への貢献が目的にあるはずです。そういったことを意識しながら、データやデジタルの活用で改善する力を身に付けていく教育の取り組みはとても貴重で重要であると感じております。

[B社の意見]

貴学の取り組みを目の当たりにし、数理・データサイエンス・AI 教育に焦点を当て、積極的に教育プログラムを拡充されていることは今後ますます拡大するデジタル時代において、必要な動きに対応していると考えられます。この取り組みにより、即戦力として社会に貢献できるようなIT人材を育成されることを期待いたします。